

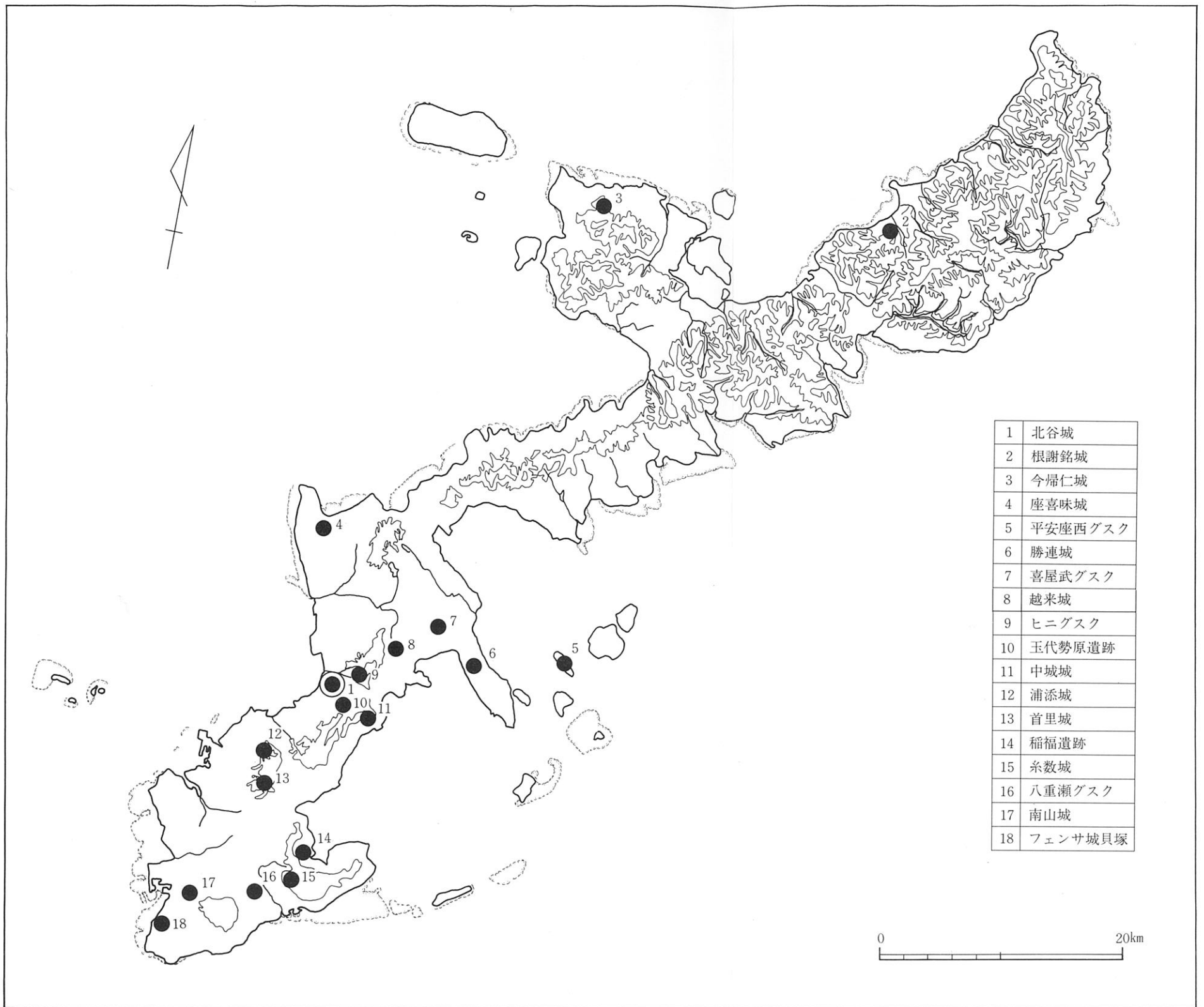
一、環境と立地

北谷城は沖縄県中頭郡北谷町字大村城原に所在する（第1図）。北谷町は沖縄本島中部の西海岸に位置し、本島中・南部の典型的な地形、地質に属している。すなわち町の東部から延びる琉球石灰岩の低平な三段の段丘が続き、西側には東シナ海に面して海岸低地が広がる。

北谷城は大川グスクとも称され、町の南部、東シナ海に注ぐ白比川^{しらひがわ}に沿って舌状に延びる丘陵（標高約50m）先端に位置する。前回までの調査⁽¹⁾によれば、東西約160m、南北約70m、総面積11,200m²の範囲にわたる四つの区画から成る城であり、その規模は、沖縄本島内において五指に数えられる。

奄美・沖縄諸島に伝わる古歌謡集「おもろさうし」の第15巻（1623年編纂）には、浦添・読谷などとともに「きたたん」として当時の北谷における有力な按司（各地方の支配者）たちの隆盛と、それをほめたたえるおもろが残されている。伝承では、北谷城の主として金満按司、大川按司といった名があげられ、その興亡が伝えられている。また白比川河口は古くから港として重要であったとする言い伝えもあり、北谷城における按司たちの繁栄と結び付けて考えることができよう。

北谷城は、石垣によって四つに区画され、便宜上東側から一の郭、二の郭、三の郭、四の郭と称されている。一の郭は標高約42.0m、面積約60m²の丘陵上最も高く狭小な東部分に占地し、西に向かって二の郭、三の郭、四の郭が、順次低くそしてより広い面積で展開される。これらの郭の北側には細長い平場が位置しており（四の郭に関しては未調査）、郭の外側は急斜面の崖となっている。郭は高さ1m前後の石垣で囲まれており、野面積みと切石積み、二つの積石法を併用する箇所が見受けられる。去年の測量調査の結果、岩盤の露頭する部分では、その間を人工の石積みでつないで石垣を構築していることが確認された。今回測量を行った三の郭・四の郭間では、岩盤の露頭があまりみられず人工の石積みが多くなり、北谷城全体を通じて、一の郭から四の郭へ下るにつれて石積みの占める割合が大きくなる傾向が指摘できる。また、三の郭・四の郭間の石垣南面に長さ約30m、幅約1.5～2.0mのテラス状平坦面が作り出されていること、石垣の上面に長さ約19m、幅約0.5～1.0mの通路状のくぼみが存在することも今回確認された。三の郭西側における三の郭と四の郭の落差はおよそ3～4mで、石垣は四の郭側に二ヵ所の突出部を持つ（第2図



第1図 沖縄本島「初期グスク」分布図(表1参照)

番号	遺跡名	所在地	野面積み	くびれ平底	文献
1	北谷城	北谷町字大村	○(+切石)	○	①
2	根謝銘城	大宜味村字謝銘城	○(-)	なし	②③
3	今帰仁城	今帰仁村今泊	○(+切石)	○	④
4	座喜味城	読谷村座喜味	-	○	⑤
5	平安座西グスク	与那城村平安座	○(-)	なし	④
6	勝連城	勝連町字南風原	○(+切石)	○	⑥
7	喜屋武グスク	具志川市字仲嶺	-	○	⑦
8	越来城	沖縄市越来	○(+切石)	○	③⑧
9	ヒニグスク	北中城村字喜舎場	-	○	⑨
10	玉代勢原遺跡	北谷町字大村	-	○	※註
11	中城城	中城村字泊	○(+切石)	なし	④
12	浦添城	浦添市字仲間	○(+切石)	なし	⑩
13	首里城	那覇市首里	○(+切石)	なし	④
14	稻福遺跡	大里村字稻福	-	○	⑪
15	糸数城	玉城村字糸数	○(+切石)	なし	⑫
16	八重瀬グスク	東風平町字富盛	○(-)	なし	④
17	南山城	糸満市字大里	○(+切石)	なし	⑬
18	フェンサ城貝塚	糸満市字名城	○(-)	○	②

第1表 沖縄本島「初期グスク」一覧表

<参考文献>

- ①北谷町教育委員会「北谷城-北谷城第1次調査-」1984年
- ②沖縄県立博物館「特別展グスク」1985年
- ③沖縄県教育委員会「沖縄グスク分布調査報告書-沖縄本島及び周辺離島-」1983年
- ④今帰仁村教育委員会「今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ」1983年
- ⑤読谷村教育委員会「座喜味城跡環境整備事業報告書(Ⅱ)」1986年
- ⑥勝連町教育委員会「勝連城跡」1984年
- ⑦具志川市教育委員会「喜屋武グスク」1988年
- ⑧沖縄市教育委員会「越来城」1988年
- ⑨琉球政府文化財保護委員会「琉球文化財調査報告書」1966年
- ⑩浦添市教育委員会「浦添城跡発掘調査報告書」1985年
- ⑪沖縄県教育委員会「稻福遺跡発掘報告書(上御願地区)」1983年
- ⑫玉城村教育委員会「糸数城跡」1977年
- ⑬糸満市教育委員会「南山城跡第1次緊急発掘調査概要」1984年

※註 北谷町教育委員会の御教示による。グスク関連遺跡としてここではあげた。

図版 9～12)。北谷城ではこういった石垣遺構の他に、二の郭内では舎殿址・敷石・柱穴、三の郭内では拝所跡とされる敷石・集石・柱穴といった遺構が、三の郭南西部においては祭祀を司るノロが利用したと伝えられる「ノロ道」がそれぞれ発見されている。

前回までの調査により、北谷城で検出された性格の明確な遺構については、その所属年代を14～15世紀ごろとする見解が得られている。また、最下層から12世紀前後のものと思われる「くびれ平底土器」の出土がある。この「くびれ平底土器」は、沖縄の先史時代（貝塚時代）から原史時代（グスク時代）への過渡期の標式となるもので、これにより本遺跡は「初期グスク」として位置付けられる。これまで調査された中で、石垣に初源的と想定される野面積みを持つグスク、「くびれ平底土器」を出土するグスクを表および分布図に示した（第1図 第1表）。これによれば、今帰仁城、勝連城、越來城に「初期グスク」として北谷城との共通性を指摘することができる。その他の遺跡についても今後の調査によっては、詳細な点での類例比較が可能となろう。たとえば、北谷城と近距離にあるヒニグスクは1965年の調査で「くびれ平底土器」を出土するグスクであることが判明しており、北谷城と同時期のグスクとして注目される。また、同町内の^{たまよせばら}玉代勢原遺跡では今年度行われた発掘調査でグスク時代の遺構、および「くびれ平底土器」を含む文化層が確認され、こういった資料は今後増えることが予想される。

琉球王朝時代には間切（村落）ごとの行政機関として番所が設置されるが、北谷番所に関しては15世紀前半に北谷城の南側、当時の集落近くに位置していたことが伝えられている⁽²⁾。従ってこの時期にはすでに北谷城はその政治的機能を失っていたと考えられる。ただし城内の拝所は第2次大戦前まで周辺地域の人々の重要な聖地であった。また周辺の崖には、現在までに82基の古墓群が確認されており、その中には先述の金満按司のものと伝えられる洞穴墓、慶長14（1609）年の薩摩侵攻の際に北谷城に配備された雍肇豊佐敷筑登之興道の墓がある。この他、遺物散布地や貝塚など数カ所が知られ、北谷城一帯は沖縄貝塚時代前期（縄文時代後期相当）から近世までの長期にわたる遺跡郡としてとらえることができる。

（園田）

註（1）北谷町教育委員会【北谷城—北谷城第1次調査】1984年
同 上 【北谷城第7遺跡】1985年
同 上 【北谷城展】1989年
熊本大学文学部考古学研究室【北谷城（1）】1990年
（2）真栄城兼良【北谷村誌】1961年



第2図 地形測量図

二、調査の目的と経過

北谷城の発掘調査は、1984年に第1次調査が行われてから、これまでに六回にわたって実施され、今回は第7次調査にあたる。第1次調査から第5次調査は北谷町教育委員会が、第6次調査と第7次調査は熊本大学考古学研究室が担当した。

第1次調査はグスクの中心部にあたる一の郭、二の郭において包含層の確認を目的として実施された。その結果、二の郭中央部で青磁などを出土する上層とフェンサ下層式土器を出土する下層の二枚の包含層が確認された。特にO-15グリッドの上層下部では多量の炭と火を受けたサンゴ礫が出土したことから、火災のあったことが推察された。また、K-90~92グリッドではサンゴ礫敷のひろがり確認され、何らかの施設の存在が予測された。

第2次調査は三の郭での遺構の確認を目的として実施された。調査以前から三の郭には拝所が存在していたと言われており、三の郭中央部には方形にめぐらせた石積みが露呈していた。この石積みを含むU-82~84グリッドを発掘したところ、拳大の石灰岩礫敷面と香炉や酒器類が検出された。これらは当所が何らかの祭祀に関する場所であったことを示すものであり、『琉球国由来記』にみられる「城内安室崎之嶽」と考えられ、ノロが祭祀を執行した伝承地とも符合することが判明した。南側のX-86・B'-81グリッドでは、第1次調査の結果と同様に上下二枚の包含層が確認され、上層からはグスク時代のピット群が検出された。また西側縁辺部のW-77グリッドでは、斜面に整地層と思われる幾重にも重なった層がみられ、それらが平坦部を形成していることが判明した。

前二回の調査結果よりグスクの中心は二の郭であったと考えられることから、第3次調査は二の郭における具体的な遺構の検出を目的として実施された。調査対象となったのは二の郭中央部であり、ここからは切石や石灰岩礫の石列と、その北東側に石を混ぜて突き固めた一段高い平場が検出され、舎殿址の存在が明らかとなった。さらに、これらの存在する遺構面の下には、一時期古いピット群が存在することも確認された。

第4次調査は丘陵部西側の平場がグスクに取り込まれていたかどうかを確認するために実施され、西側平場の崖面に野面積みの石垣が検出された。このことから、この平場がグスクの郭の一つであったことが確認され、これを四の郭と仮称した。この結果、北谷城は沖縄でも有数の大規模なグスクであったことが判明した。

第5次調査では二の郭の構造をより明確にするために、石垣と城門の確認を目的として

実施された。対象となった発掘区は第3次調査で検出された舎殿址の南側であり、石垣内面にはサンゴの切石を用いた石列が、石垣外面には根石列が確認され、これらは一の郭まで続くことが判明した。また、舎殿址の南側平場にはヒンプン状⁽¹⁾の石列が確認され、その配置から二の郭南西部に城門が存在することが予測された。

第6次調査は第5次調査でその存在が予測された二の郭城門の確認を目的として実施された。調査の結果、二の郭から三の郭に続く人為的に造成されたと思われる傾斜面と平面の連続が確認された。この部分が出入口であった可能性は高いが、グスクがその機能を終えた以降の通路とも考えられる。また、この通路に隣接して、石垣から三の郭に突出した張り出し状遺構が確認された。しかしその性格は不明である。発掘調査に併行して実施した測量調査は二の郭を中心に一の郭から三の郭までを含めて行われた。測量調査では本グスクが琉球石灰岩の岩盤と岩盤の間を人為的に礫でつなぎ、自然地形を大きく改変することなく築造されているという特徴を図化できた。

これまでの六回の調査によって、以下のことが判明している。北谷城は四つの郭から構成されており、石垣は野面積みと切石積みを組み合わせて構築している。二の郭・三の郭には二枚の包含層が存在し、出土遺物から上層には14～15世紀、下層には12世紀前後との年代が与えられる。14～15世紀には堅固な石垣と舎殿址が構築されており、防御的な城塞としての性格を強めている。12世紀前後の「初期グスク」段階にはわずかな遺構の存在は確認されているものの、この時期の遺構面の調査面積が狭いためにその全容は明確な形ではとらえられていない。

今回の第7次調査は課題として残されていた「初期グスク」段階の遺構の把握を目的として、三の郭南部の平場を中心に実施した。また、発掘調査と併行して行った測量調査は第6次調査に引き続き、三の郭を中心に50cmごとに等高線を記入して作図した。調査区にはこれまでの調査と同様に2m×2mのグリッドを設定し、南北にA・B・C……、東西に1・2・3……の符号を付した。まず第2次調査でピット群が検出されたX-86グリッドを再発掘し、層序と遺構を確認した後、随所に50cm幅の土層観察用のセクション・ベルトを残してW～A'-85・86グリッドを発掘し、Y-87、C'・D'-85～87グリッドを拡張した。さらに、石敷の構造を確認するためにC'・D'-85グリッド西壁に幅30cmのサブ・トレンチを設けた。また、Y-86グリッド北東隅とZ-85グリッド南西隅では自然遺物の構成を把握するためにブロック・サンプリングを行った。(秦)

註(1) 沖縄列島の民家において、門の内側、母屋の前面に設けられる石作りの目隠し(『建築大辞典』 彰国社 1973年)。

三、調査の概要

1. 層序 (第3図 図版2・3)

今回調査した地点は三の郭の南端にある畑地で、北谷丘陵の縁辺部に近く、地形がわずかに南へ傾斜している。そのため発掘区の南側は北側よりも深く攪乱を受けており、C'・D'グリッドでは遺構の直上まで破壊が及んでいる。また北谷城は将来史跡公園として保存・整備される予定であるため、今回の調査ではグスク時代の遺構検出面までの掘り下げに留めており、グスク時代以前の遺構については今後の調査に委ねることとする。

以下に基本層序を列挙する。

I層 耕作土および耕作に伴う攪乱層である。暗褐色を呈する軟質の土で、貝殻片や陶磁器片などの遺物は小片が多い。耕起の及ばない下部では粘性のある黒褐色土に変わり、完形の貝殻もみられるようになる。

II層 色調、堆積の状態などによりII-a、II-b、II-cの3層に細分した。

II-a層 暗褐色の粘質土である。炭化物を含み、遺物はほとんどが小片で、貝殻片・サンゴ片共に数量が少ない。発掘部の北端部では堆積がみられない。

II-b層 赤褐色粘質土である。III層を切り込んで堆積しており、含まれる貝殻片・サンゴ片はごく少量で、堅くしまっている。調査の途中で上面に小礫の広がり認められた。

II-c層 オリーブ黒色を呈する粘質土で、III層に切り込んでいる。W・X-85グリッドからW-86グリッドにかけて1.5m程の幅で帯状に堆積する。貝殻片を少量含む。

II-c層については溝状に堆積しているため、洪水層と思われる。またII-b層はその特徴から、発掘区北側の押所を構築する際の整地層の可能性がある。

III層 黒褐色粘質土である。貝殻・サンゴの破片を多量に含み、陶磁器片、土器片などの遺物も豊富である。W~A'-85・86グリッド、Y-87グリッドのほぼ全域に堆積していたが、Y-87グリッドの東壁際とA'-85・86グリッド南壁際、またC'・D'-85~87グリッドでは遺構の覆土としてのみ確認され、層をなさなかった。III層は配石柱穴(ピット2~8)と土塙⑫の下部では暗褐色を呈し、黒褐色粘質土のみを覆土とする遺構群とは埋没時期に若干の差があると思われる。

IV層 褐色を呈する粘性の強い土で、細かく破碎された貝殻片を含む。色調は均一でな

く、赤みの強い褐色の土に茶色がかった褐色土が混入し、乾くとブロック状に剥がれる。C'・D'-85～87グリッドでのみ確認された。ここでは石敷遺構はIV層の上に構築され、配石柱穴および石敷遺構に伴う柱穴群はIV層に掘り込まれている。このためIV層は整地層である可能性が高い。C'・D'-85グリッド西壁サブ・トレンチ内の石敷遺構下で検出されたピット1は、この層を覆土とする。

V層 赤褐色を呈する粘質土で、いわゆるマージ（地山）層である。粘性が強く、乾燥すると非常に硬くなる。 (松村)

2. 遺構

今回の発掘調査は、先の「二、調査の目的と経過」で述べたように三の郭南側の平場を中心に行った。その結果、発掘区南側に配石柱穴（7基）・石敷遺構、また発掘区全域に柱穴群（81基）・土壇群（12基）が検出された。これらの遺構は、層序・配置・切り合い関係および共伴遺物などより、ある程度の時期差が考えられる。すなわち、当発掘区で最も古い時期として確認された遺構を第1期、その上方で検出された配石柱穴および石敷遺構とこれに伴う柱穴群を第2期として設定した。なお、これらに該当しない土壇群および柱穴群については「その他の遺構」として取り扱った。

以下、各遺構の検出状況などについて述べる。

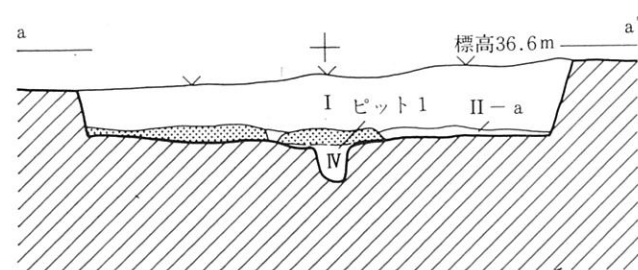
【第1期の遺構】（第3図）

第1期の遺構は、C'・D'-85グリッド西壁サブ・トレンチ内で発見されたピット1で、石敷遺構下で検出された。平面形は円形を呈すると思われる。トレンチの幅が狭いためIV層の堆積状況は明らかではないが、ピット1はV層に掘り込まれ、IV層を覆土とする。石敷遺構を構成するサンゴ礫や貝殻片に混じってくびれ平底の底部片が発見されており（図版8下）、この柱穴の年代はくびれ平底土器の時期以前まで溯る可能性が高い。

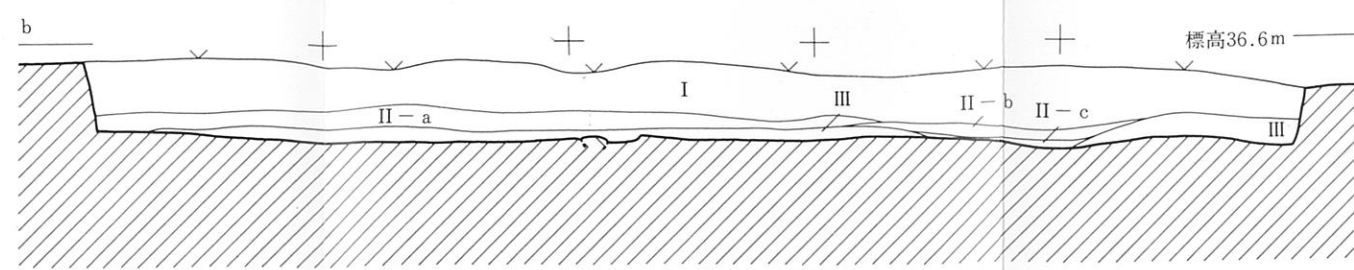
【第2期の遺構】（第5図 図版4下・7上）

第2期の遺構としてはZ-86、A'-85・86、C'・D'-85～87グリッドで検出された7基の配石柱穴（ピット2～8）、石敷遺構とこれに伴う6基の柱穴（ピット9～14）があげられる。これらの配石柱穴と柱穴はいずれもIII層を覆土とする。

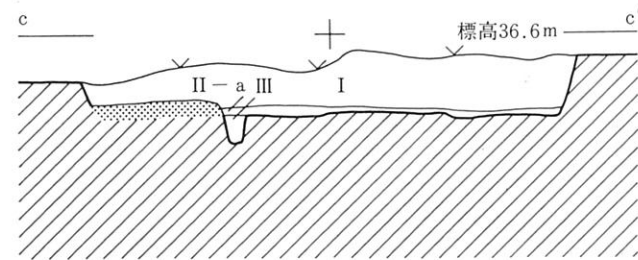
配石柱穴は柱穴の内部および周囲を大小のサンゴ塊や礫で囲んだものである（図版6・7下）。サンゴ塊や礫は比較的形が整っており、柱穴の内部では平らな面を内側に向けて配している。平面形は円形に近いが、柱穴内部では隅丸の方形を呈するものもある。ピット



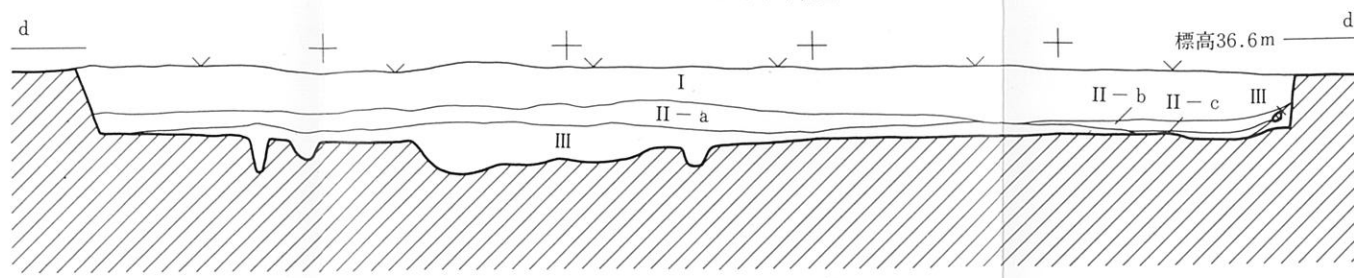
C'・D' - 85グリッド西壁



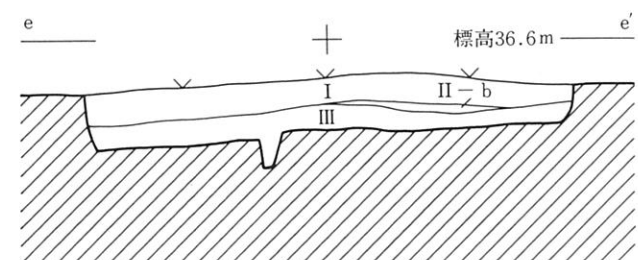
W~A' - 85グリッド西壁



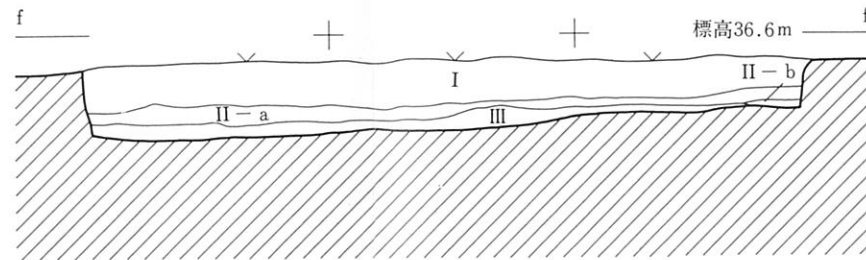
C'・D' - 86グリッド西壁



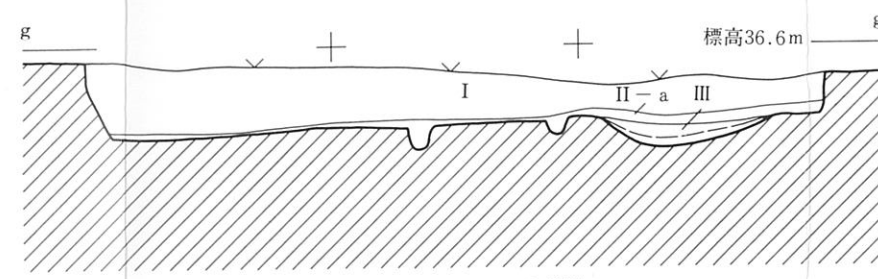
W~A' - 86グリッド西壁



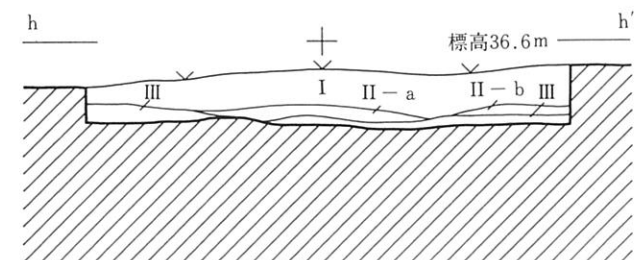
W - 85・86グリッド北壁



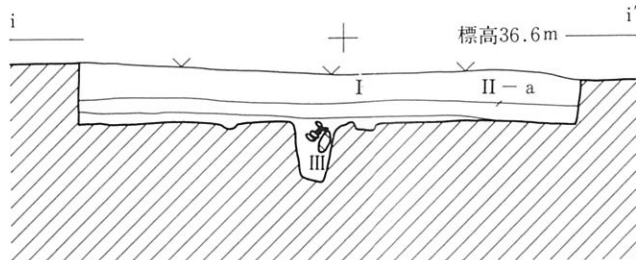
Y - 85・86・87グリッド北壁



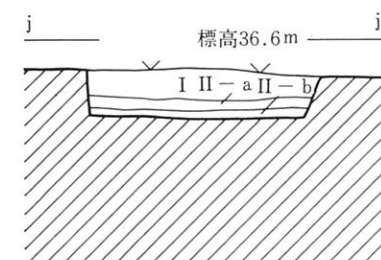
C' - 85・86・87グリッド北壁



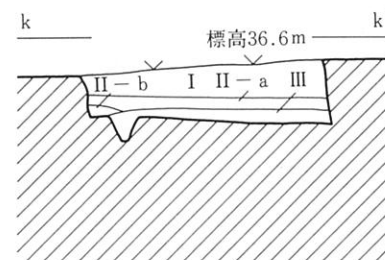
W・X - 86グリッド東壁



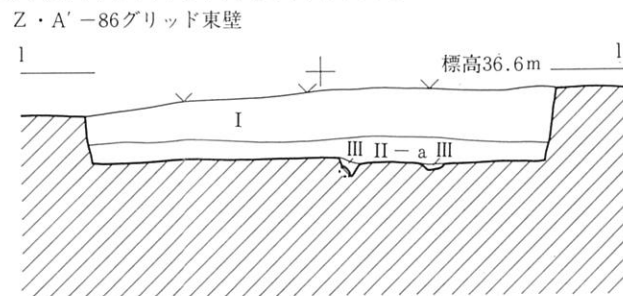
Z・A' - 86グリッド東壁



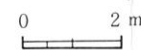
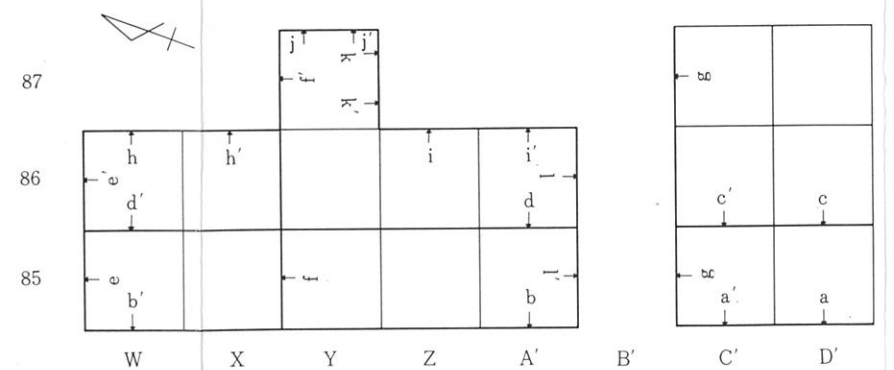
Y - 87グリッド東壁



Y - 87グリッド南壁

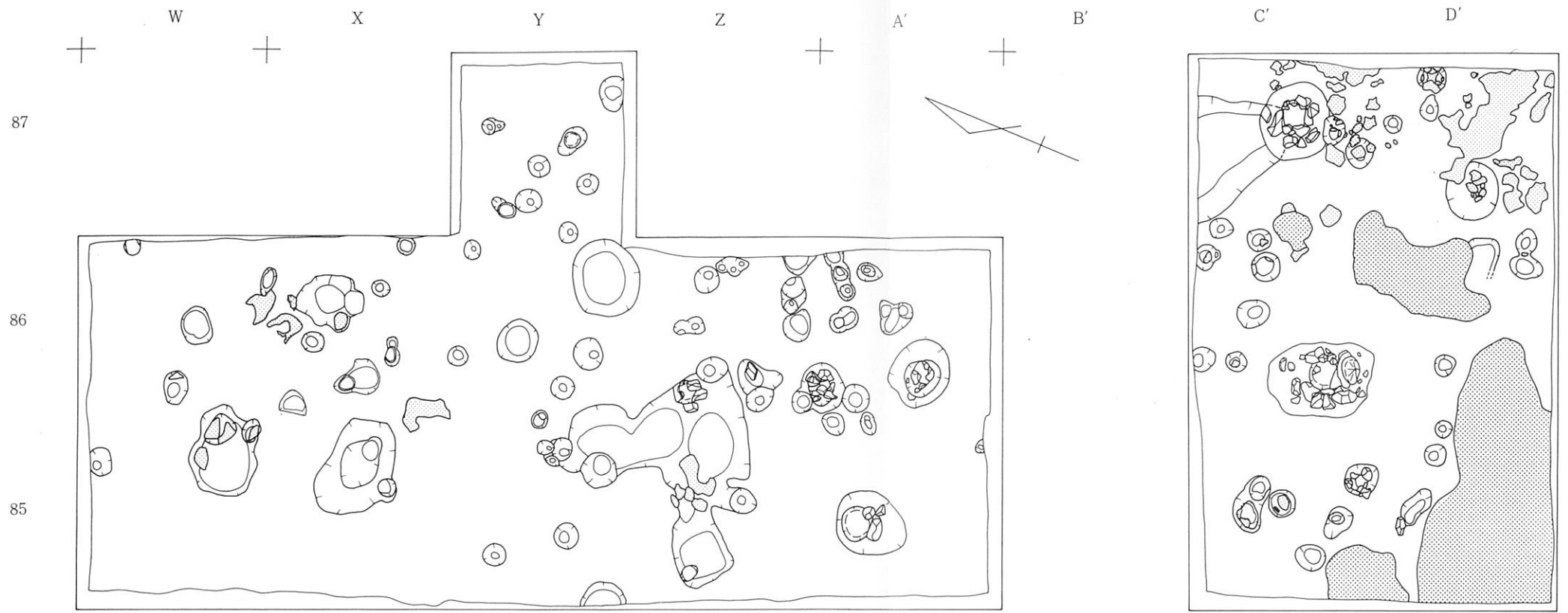




A' - 85・86グリッド南壁



凡例 石敷

第3図 土層断面図



凡例
 石灰岩 
 石敷 

0 2 m

第4図 遺構掘り上がり図

2～5・8は土壌によって一部破壊されたものもあるが、直径はすべて15cm程である。ピット3・4では底面が検出され、特にピット3の底には比較的平らな面をもつサンゴ塊がみられた。ピット6・7はほぼ同じ規模で、直径は30cm前後、底面は深さ60cmまで掘り下げたが確認されなかった。ピット6～8では、柱穴よりもかなり大きめの掘り方が検出されている。掘り方はピット6とピット8ではほぼ円形を呈し、直径がそれぞれ約80cmと36cm、ピット7では楕円形を呈して長径約110cmである。ピット6とピット7、ピット7とピット8の間隔は、それぞれ282cm、181cmであった。覆土はすべてIII層であるが、暗褐色を呈しており、特に炭や焼土の混入が多くみられた。遺物は主に陶磁器片と土器片で、骨片・サンゴ礫・貝殻片も混じり、貝殻は下方では完形に近くなる。柱穴の上面をサンゴ塊で囲んだ遺構は、沖縄県島尻郡大里村字稲福に所在する稲福遺跡⁽¹⁾にみられる。しかしピット2～5・8に類似する、内部までサンゴ塊を配した柱穴は沖縄市字越来の越来城⁽²⁾で数基検出されているにすぎず、ピット6・7のような大型の配石柱穴の類例は、現在のところ知られていない。

石敷遺構は親指大のサンゴ礫と貝殻片に土を混ぜ、平らに均したものである。かなり堅く敷き詰められており、一部に平らなサンゴ塊を併用している。C'・D'-85グリッド西壁際からピット6・7の間へ「コ」の字状に残存する四組が検出され、グリッド南西隅の最も大きなもので長さ約290cm、幅約140cm、厚さ約15cmを測る。石敷遺構は直上まで攪乱されており、元々一連の石敷であった可能性もあるが、D'-85グリッド西壁土層断面では二組の石敷の間に隙間が認められるため、意図的にわずかな間隔を取りながら、互い違いにずらして配したものと思われる(第3図 図版3下)。石敷の構造は、遺構が保存される予定であるため、サブ・トレンチを設けて厚さを確認するに留めたが、D'-86・87グリッドでは一部掘り方らしい落ち込みが認められた。石敷を構成するサンゴ礫・貝殻片に混じって陶磁器片・土器片が出土している。石敷遺構の北側の6基の柱穴は、形状に違いはあるがすべてIII層を覆土とし、石敷に沿って並ぶため、石敷に伴った一連の遺構と推測される。柱穴出土の遺物は陶磁器片数点である。北谷城の第1次調査では、二の郭の北西隅でサンゴ塊を人為的に敷いた遺構が検出されているが、性格は不明である⁽³⁾。また沖縄県中頭郡読谷村に所在する座喜味城⁽⁴⁾では、二の郭門から一の郭の門へ続く砂利敷道路が発見されている。しかしこの砂利敷道路は、地表下を直径15cm程のサンゴ塊で部分的に土留めしたもので、北谷城の石敷遺構に比べて頑丈な作りである。

これらの遺構はZ・A'グリッドではV層に、C'・D'グリッドではIV層に掘り込まれてお

り、IV層は整地層の可能性がある。

第2期の遺構群は配列状況から、ピット6～8を門柱とする、石敷を伴う門状の遺構と、北側の配石柱穴（ピット2～5）からなる建築遺構と考えられる。石敷遺構に沿っているピット9～14は生け垣状の構築物を構成するものであろう。ピット2～4は間隔が異なるが、ピット7と共にほぼ同一線上に並ぶため、東西を主軸とする建築物が存在したと考える。従って発掘区の東側には、ピット2～4・11に相対する遺構の存在が予測されよう。

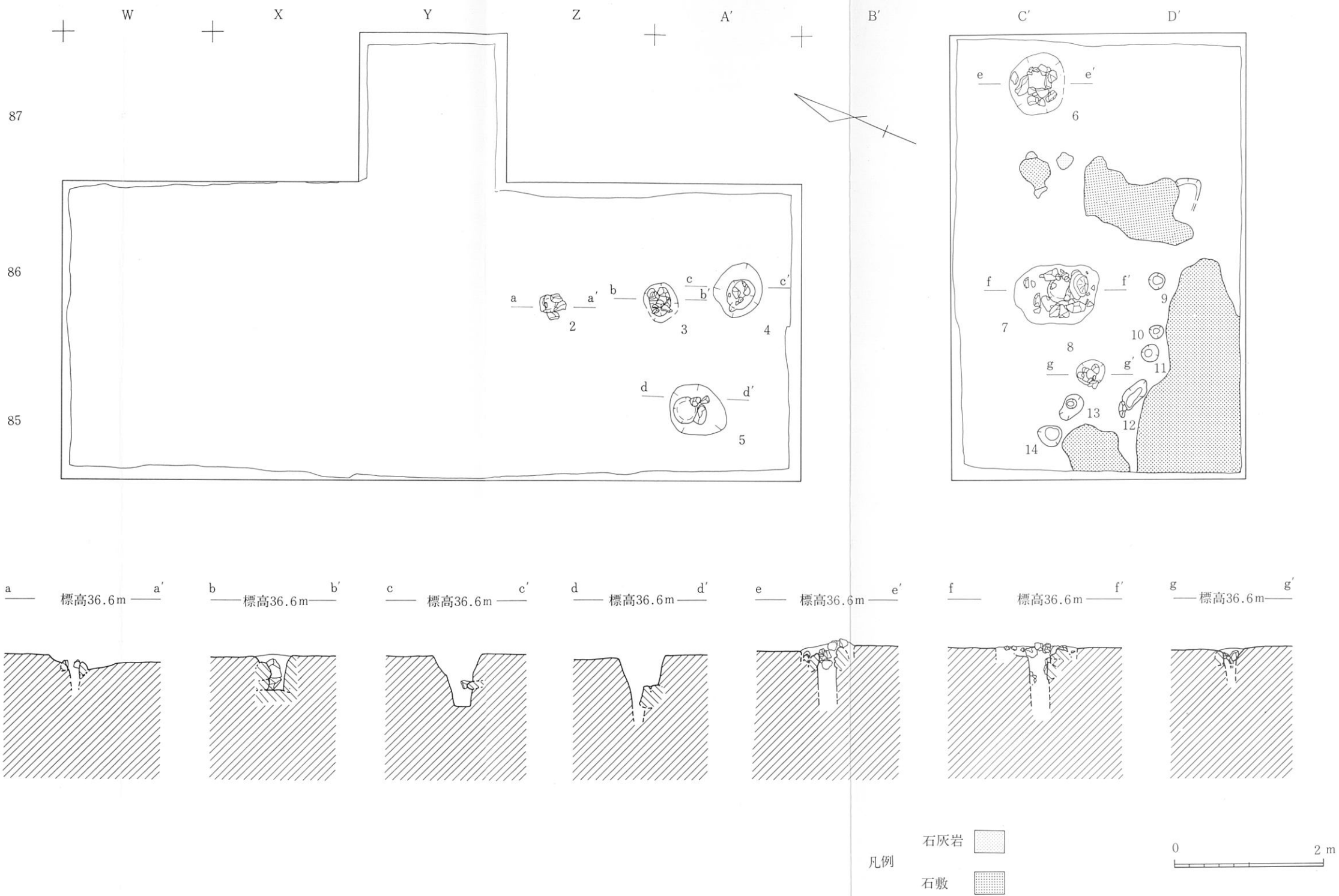
【その他の遺構】（第6・7図 図版4・7上）

その他の遺構としては柱穴群と土壇群がある。柱穴は74基、土壇は12基あり、これらは発掘区の中央部に多く分布する。

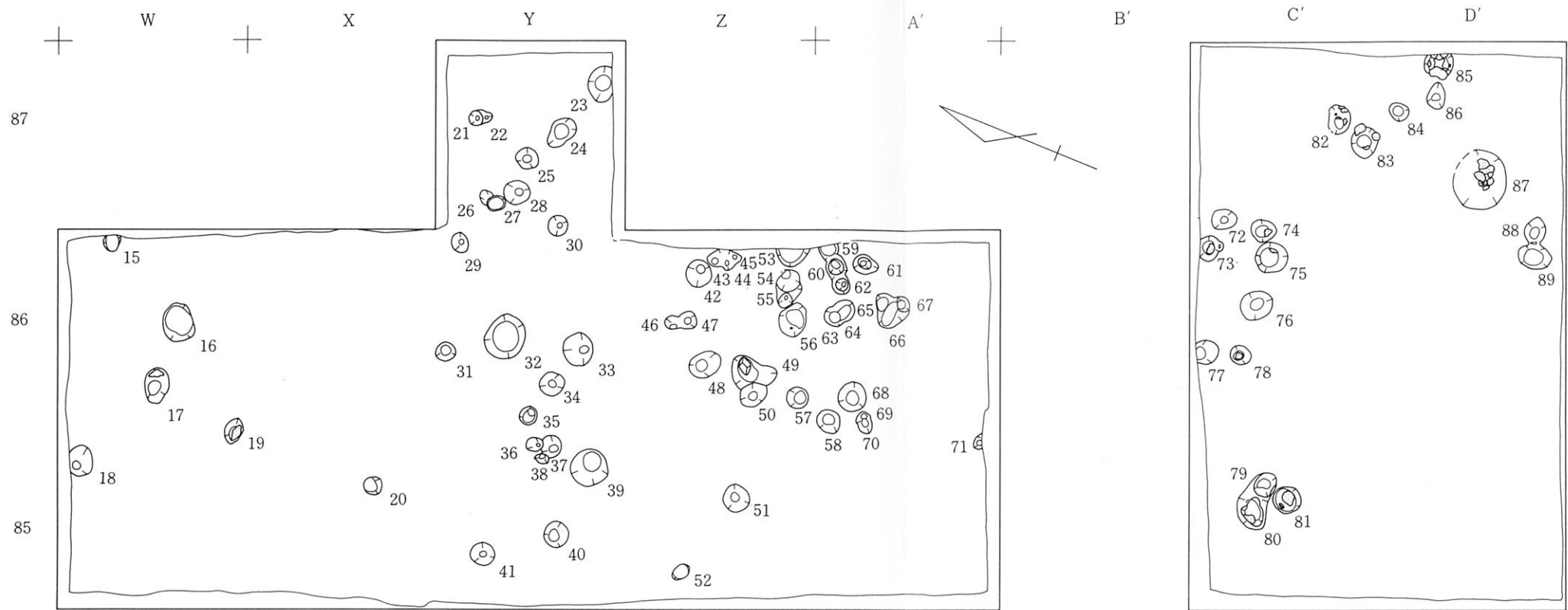
柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、直径は20～40cm前後、深さは5～20cm前後であり、配石柱穴に比べて浅いものが多い。覆土にはII-a層をもつものとIII層をもつものがあり、後者が多い。前者は軟質で遺物は少なく、後者はややしまっている。出土遺物には陶磁器片・土器片・貝殻片・骨片・炭などがあり、いずれも小片である。これらの柱穴群からは建築物を復元できるだけの配列を見いだすことはできなかった。


柱穴群の時期としては、第2期の遺構を切り崩して作られたもの（ピット57・82）があり、その逆はみられないことから、第2期よりも新しい時期の遺構であることは確実である。前に述べたように、柱穴群には覆土にII-a層をもつものとIII層をもつものがあり、後者間に切り合い関係があることから、これらの間にはある程度の時期差があるものと考えられる。また、前者と後者が切り合っているものもあるが、III層の堆積に偏りがあるため覆土の差からは明確な時期差を確認できなかった。

土壇群は不整形で長径は50～140cm前後、深さは20～40cm前後であり、立ち上がりの急なもの（土壇③・④・⑨～⑪）と緩やかなもの（土壇①・⑤～⑧・⑫）がある。いずれもIII層を覆土とし、深い土壇の底付近ではIII層を覆土にもつ柱穴と同様にマージがブロック状に混じる。土壇⑫では覆土中位に貝殻片・炭・サンゴの小礫の薄い層がみられ、それより下は暗褐色、上は黒褐色を呈していた。土壇⑦・⑨～⑫は配石柱穴の一部を破壊して掘られている（図版6）。出土遺物には陶磁器片・土器片・貝殻片・サンゴ礫・骨片・炭・焼土などがある。これらは柱穴出土のものより大きく量も多い。土壇⑤～⑦ではサンゴ塊が上面に詰まった状態で検出されており、これらは意図的に投棄された可能性も考えられる。注目される遺物としては、土壇⑪から検出された貨銭1枚がある（図版5上）。これは覆土の中位より出土している。また、土壇⑤からはウシカウマのものと思われるほぼ完全な焼



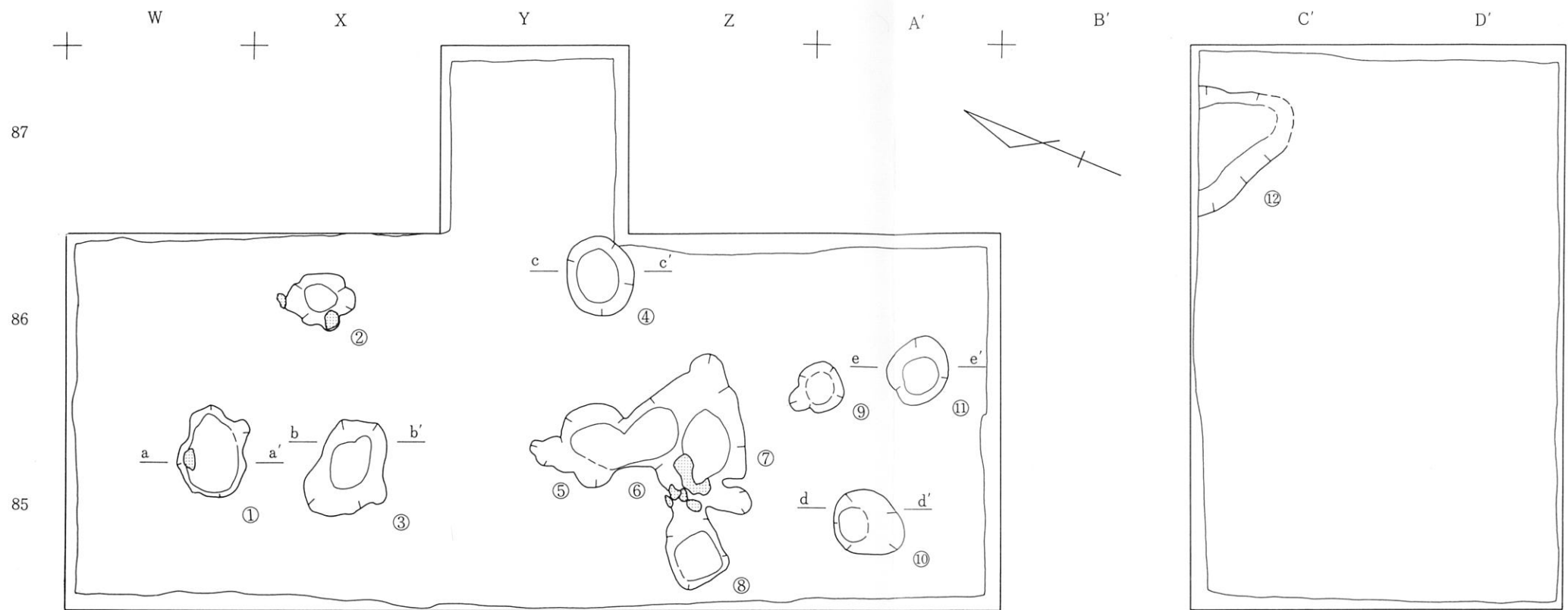
第5図 遺構配置図(1)
第2期の遺構



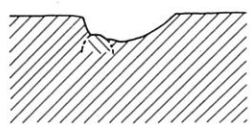
凡例 石灰岩 

0  2 m

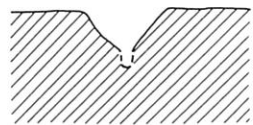
第6図 遺構配置図(2)
その他の遺構 柱穴群



a — 標高36.6m — a'



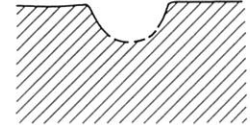
b — 標高36.6m — b'



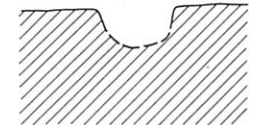
c — 標高36.6m — c'




d — 標高36.6m — d'



e — 標高36.6m — e'



凡例 石灰岩 



第7図 遺構配置図(3)
その他の遺構 土壇群

骨が出土した（図版5下）。

土壌は柱穴の少ないところに掘られているものが多く、その出土状況・出土遺物からみて、建物が廃絶された後の廃棄場としての機能が想定される。

これら土壌群の時期については、前述のように第2期の配石柱穴を破壊しているものがあり、これらは第2期よりも新しい時期の遺構である。柱穴群との関係では、土壌には柱穴を切っているもの（土壌①・③・⑤・⑦～⑨）があり、これらは柱穴群に後続するものと考えられる。また、土壌の覆土がⅢ層のみであることから、Ⅱ-a層を覆土にもつ柱穴の中には土壌群より新しい時期のものがあることが考えられる。（秦・園田・松村）

- 註（1） 沖縄県教育委員会『稲福遺跡発掘調査報告書（上御願地区）』1983年
このサンゴ塊は報告書では「楔石」と称されている。
- （2） 沖縄市教育委員会『越来城』1988年
- （3） 北谷町教育委員会『北谷城—北谷城第一次調査—』1984年
- （4） 読谷村教育委員会『国指定史跡 座喜味城跡 環境整備事業報告書(Ⅱ)』1986年

四、出土遺物

1. 磁器（第8・9図 図版13・14上）

今回の調査で検出された磁器は小片を含めて総数約730点で、Ⅲ層出土のものを中心とし、Ⅰ・Ⅱ-a層出土のものがこれに次ぐ。すべてが破片で、原形に復元できたものは皆無である。大部分が青磁で、白磁・染付が少数みられる。以下、その種類ごとに説明する。

青磁（第8図、第9図18～26）

碗が最も多く、小皿・盤がこれに続き、杯と壺が数点検出された。

- （1）青磁碗（第8図2・3・5・8～10・15・16、第9図18・19・24）

口縁部片は、その先端の形状により次の3つに大別できる。

A：外反するもの B：膨らみをもつもの C：直立するもの

A（第8図2・8、第9図24）

2はピット5より出土したもので、外器面に蓮弁文をもち、胎土は灰白色、釉はオリブ灰色を呈する。8は無文で、胎土は灰白色、釉はオリブ灰色である。復元口径は16.8cmである。24は外器面途中まで施釉されており、胎土は淡黄色、釉は灰白色を呈する。内外器面に、細かい貫入とロクロ成形痕がみられる。外器面露胎部にはハケ目調整痕が残り、

見込みには沈線による円圏がめぐる。復元口径は16.8cmである。

B (第8図10、第9図19)

10はピット7の掘り方から検出された。外反気味の口縁で、内外器面共に細かい貫入がみられる。胎土は灰黄色、釉は灰オリーブ色である。19は波状の玉縁口縁である。内器面に、丸みをもった花卉文状の文様が施される。胎土は灰白色、釉はオリーブ灰色である。

C (第8図3・5・9、第9図18)

4点共、外器面に雷文をもつ。3・9は口縁部断面が舌状を呈する。共に胎土は灰白色、釉はオリーブ灰色である。5は胎土は灰白色、釉は浅黄色を呈する。18は内外器面に細かい貫入がみられ、胎土は灰白色、釉はオリーブ灰色を呈する。

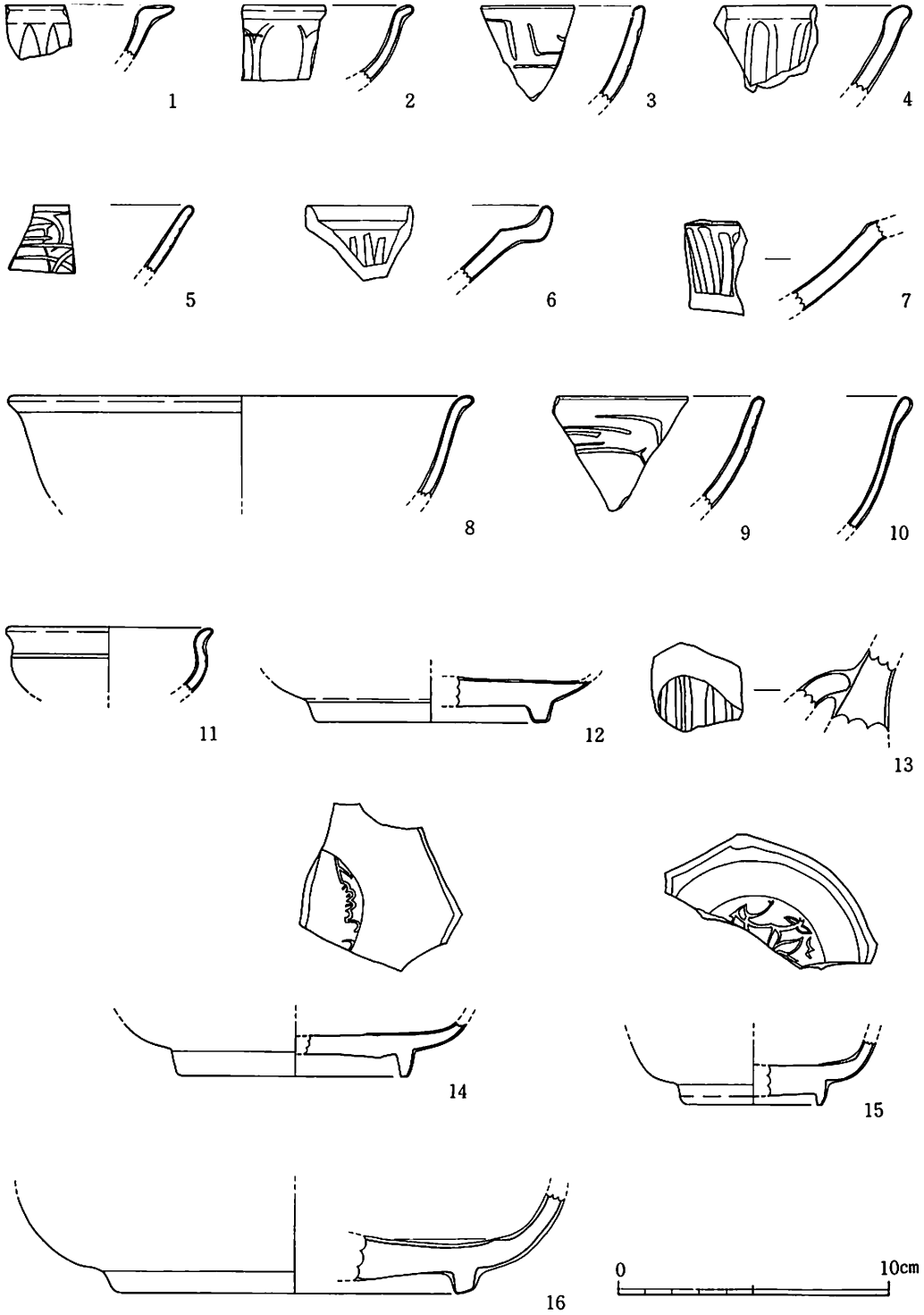
底部片 (第8図15・16)

15は、畳付・高台内壁・外底と見込みは露胎である。外底と見込みにロクロ成形痕が残る。内外器面に、縦方向に数条の貫入がみられる。見込みには、篋描きによる植物の文様が施される。復元底径は5.0cmである。16はピット3より検出された。外底部は釉がドーナツ状にかき取ってあり、見込みには突線の円圏がめぐる。釉は約1mmと、厚めである。復元底径は12.8cmである。2点共、胎土は灰白色、釉はオリーブ灰色を呈する。

(2) 青磁小皿 (第8図1・4・12・14、第9図20・23・25)

1・23はいわゆる鐔縁口縁をなす。1は外器面に蓮弁文が施されており、胎土は灰白色、釉は淡緑色を呈する。23は外器面に蓮弁文が施され、内外器面共に粗い貫入をもつ。胎土は淡黄色、釉はオリーブ灰色を呈する。復元口径は11.0cmである。4は先端がわずかに外反する。釉は約1mmと厚めで、内外器面に気泡が多くみられる。内器面には蓮弁文が施されており、胎土は灰白色、釉はオリーブ灰色を呈する。ピット5から検出された。20は口縁部に稜花を刻んだ、いわゆる腰折皿の口縁である。内外器面共に、稜花文直下にそれぞれ二条の沈線がめぐり、さらにその下に内器面には一条の沈線、外器面には一条の突線が認められる。内外器面に粗い貫入がみられる。胎土は灰白色、釉はオリーブ灰色を呈する。

底部片は3点を図示した。12は底部から胴部にかけて、極端に器壁が薄くなる。外底にはロクロ成形痕が残る。全体に造りが粗雑で、露胎である外底部に、畳付から一部釉が流れ込んだままになっている。内外器面に細かい貫入がみられる。胎土は灰白色、釉は青みを帯びた灰白色を呈し、光沢がない。復元底径は8.6cmである。14の胎土は淡赤橙色から、胴部に移るにつれて灰白色になり、釉は浅黄色を呈する。高台は削り出しによる成形で、見込みと外底部にはロクロ成形痕が残り、外底部にはその上にハケ目調整痕がみられる。



第 8 図 出土遺物実測図(1)

Ⅲ層：3・5・8・9・12～14 ピット3：16 ピット5：2・4・15 ピット7：7
 ピット7掘り方：10 土壇④：6 土壇⑦：1 D'-85西壁サブ・トンチ：11

全体に釉は薄く、特に畳付と高台内壁には非常に薄く施釉されている。見込みと外底部の釉はかき取ってあり露胎である。見込みには篋描きにより植物様の文様を施し、その後施釉している。復元底径は8.4cmである。25は胎土は灰白色、釉はオリーブ黄色を呈する。内外器面に細かい貫入がみられる。外底部は釉がかき取ってあり露胎である。見込みが篋状工具により削り取られているため見込みの部分は盛り上がり、中央部に篋描きによる花文が施される。胴部の残りが悪いため皿とは断定できず、碗の可能性も考えられる。復元底径は5.6cmである。

(3) 青磁盤 (第8図6・7、第9図22)

6・7・22はいずれも内器面に蓮弁文をもち口縁が鐔状をなす、いわゆる鐔縁盤である。6は土壙④から、7はピット7から検出された。以上2点が幅2.0～3.5mm程度の蓮弁文をもつものに対し、22の蓮弁文は幅0.8～1.8mmと狭く不明瞭である。6は胎土が淡黄色、釉は明黄褐色を呈し、内外器面に細かい貫入がみられる。7は胎土は灰白色、釉は青みを帯びた灰白色を呈し、内外器面に細かい貫入がみられる。22は胎土が灰白色、釉は明緑灰色を呈する。復元口径は19.4cmである。

(4) 青磁杯 (第8図11、第9図21・26)

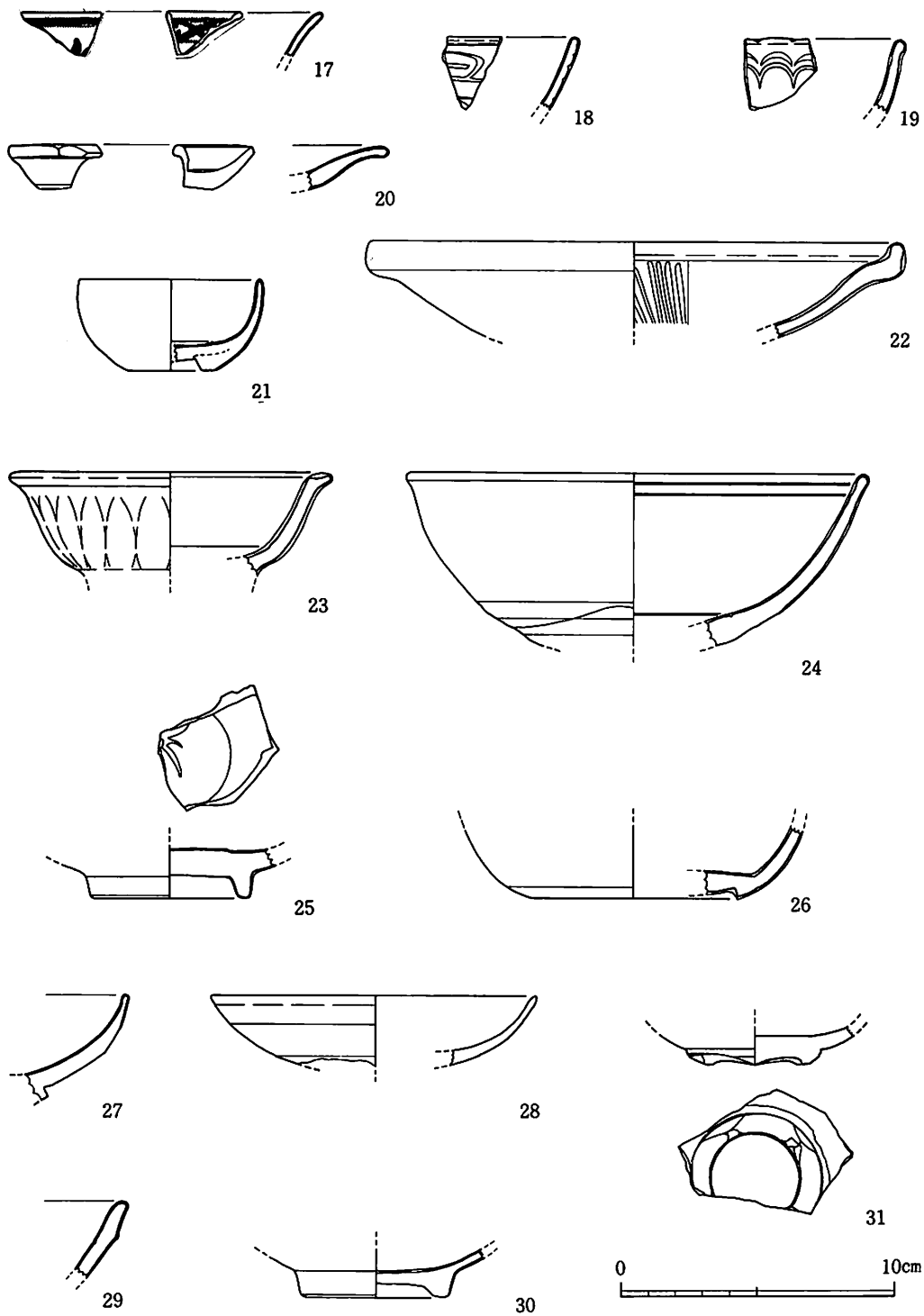
11はD'-85グリッド西壁サブ・トレンチより検出された。丸みをもった胴部からつまみ上げたように外反する口縁部にかけて、なめらかな曲線を描く。肩部に一条の突線が施されており、その直上の胎土は削り取られたような感じで、釉がたまっている。胎土は灰白色、釉はオリーブ灰色を呈する。復元口径は7.2cmである。本品は香炉の可能性もある。21・26はピット24から検出された。共に、いわゆる基筈底杯である。21は畳付に平坦な部分と尖った部分とがあり一様でない。畳付・外底は、一部釉が流れ込んでいるところを除き露胎である。内外器面に細かい貫入がみられる。見込みには突線の円圏がめぐる。胎土は灰白色、釉はオリーブ灰色を呈する。復元底径は3.2cmである。26は畳付が尖っている。内外器面に全面に施釉されており、細かい貫入がみられる。胎土は灰白色、釉は青みを帯びた灰白色を呈する。復元底径は7.6cmである。

(5) 青磁壺 (第8図13)

13は壺の胴部と底部の接合部分である。外器面に不明瞭な蓮弁文がみられる。胎土は灰白色、釉はオリーブ灰色を呈する。

白磁 (第9図27～31)

27～29は口縁部片である。27は胎土は灰白色、釉は灰色を呈する。内外器面にロクロ成



第9図 出土遺物実測図(2)

I層：27 II-a層：19・20・22~25・29 II-b層：18
 III層：17・30・31 ピット5：28 ピット24：21・26

形痕が残る。外器面は篋状工具で削り取り、成形してある。釉は外器面途中で削り取られている。器種は皿と思われる。28は胎土は淡黄色、釉は灰白色である。釉は極めて薄く、むらなく施されるが、胴部下方は露胎である。外器面にロクロ成形痕が認められる。内外器面に細かい貫入がみられる。皿の可能性が高い。復元口径は12.0cmである。29は胎土・釉共に灰白色を呈する。内外器面共に細かい貫入がみられる。内器面に一条の沈線がめぐり、外器面は「く」の字状を呈する。小片のため器種の推断は困難である。30・31は底部片で、皿の可能性が高い。共に胎土は灰白色、釉は淡黄色を呈し、内器面に重ね焼きの痕跡が認められる。30は畳付より内側は露胎である。内外器面に細かい貫入がみられる。復元底径は5.2cmである。31は畳付を篋状工具により部分的に面取りした、いわゆる扶入高台をもつ。内器面全体と外器面の高台際まで、極めて薄く施釉されており、細かい貫入が内外器面にみられる。外底部に篋状工具で削り出した痕が認められる。復元底径は3.2cmである。

染付 (第9図17)

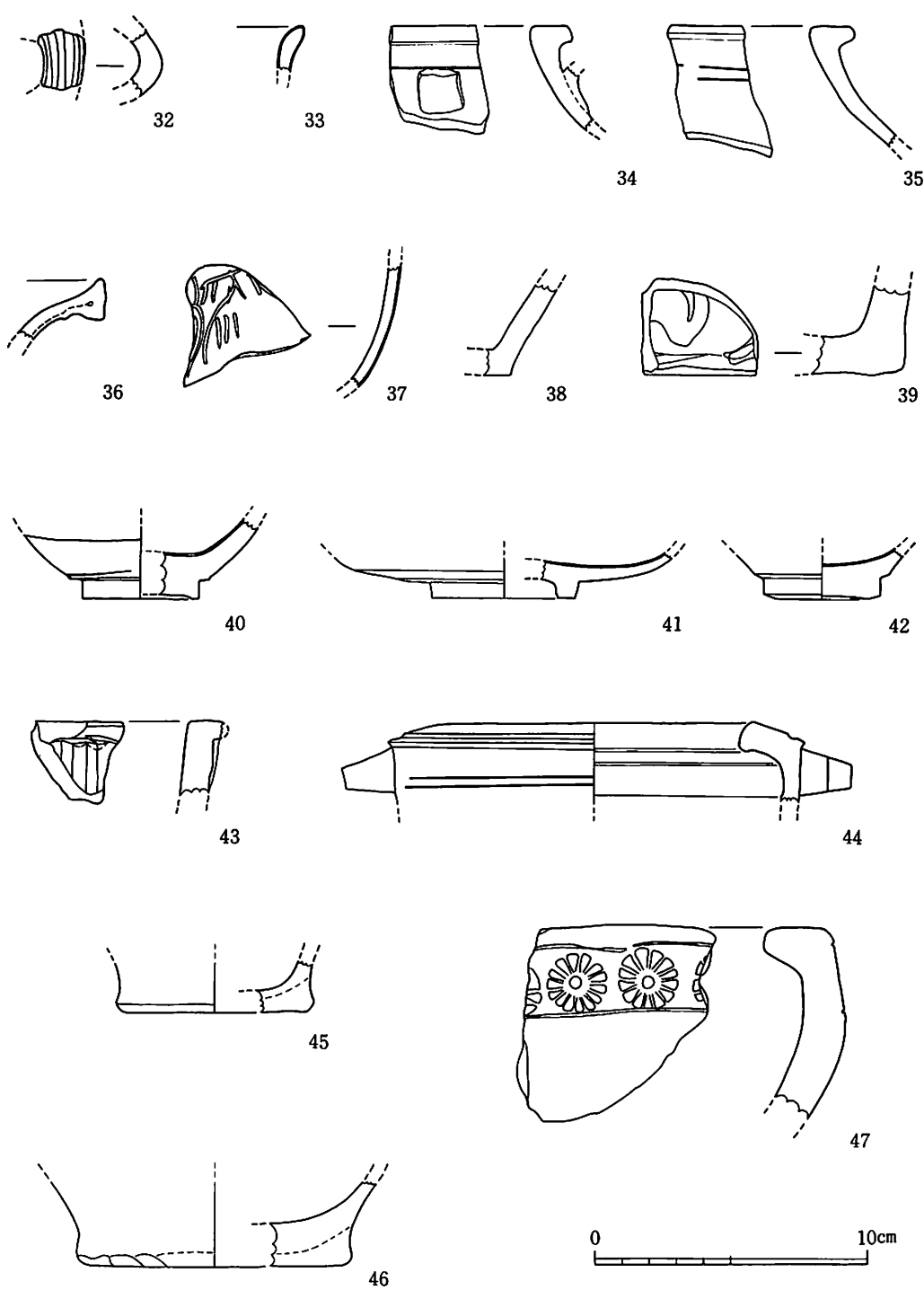
17は染付碗の口縁部片である。胎土は灰白色、釉は淡青灰色、呉須は青灰色を呈する。器壁は極めて薄く、胎土も緻密である。小片のため文様の形態は不明であるが、外器面については口縁部をめぐる帯状の文様と、草花を表すと思われる文様が認められる。外器面に比べ、内器面の呉須は薄く不明瞭である。 (限本)

2. 陶器および土器 (第10図 図版14下)

磁器以外の器物は、陶器・陶質土器・瓦質土器・土器に区分でき、陶器類は小片を含めて約510点、土器は約420点であった。これらの資料は表面採集資料が多い。出土資料の中ではIII層出土のものが大多数を占め、II-a層からのものがこれに次ぐ。種類別に見ると土器が多く、陶器がこれに次ぐ。瓦質土器はわずかである。陶器は褐釉陶器と黒釉陶器に分けることができるが、前者がその大半を占める。これらのうち器形を推定できる資料はごく少数であった。復元できるものについてその概要を述べると、褐釉陶器は壺および甕、黒釉陶器は碗、また陶質土器は深鉢、瓦質土器は火舎、土器は深鉢が器種の中心をなす。

陶器 (第10図32・34～37・39～42)

32は縦耳片である。壺の頸部に接合されたものと思われる。縦に二条の凹線が施されている。胎土は鈍い褐色を呈し、全面に鈍い黄褐色の釉が施される。34～36は壺の口縁部片である。34は胴部の張る器形が想定される。口縁部は逆「L」字状を呈し、粘土を貼り付けて口唇部を幅広く平坦に成形している。肩部には縦耳の痕跡を有し、その直上に一～二条の凹線がめぐり、内器面にはロクロ成形痕を有し、その上に指頭圧痕が認められる。鈍



第10図 出土遺物実測図(3)

表採：34・36・44・47 II-a層：38・40・46
 III層：33・39・43 IV層：45 ピット5：32・37
 ピット7：35 土壇①：42 土壇⑥：41

い黄褐色の胎土に、灰黄色の釉が施される。口唇部の釉はごく薄く、施釉後伏せ置きしたものであろう。35は、34より胴部が張るものと思われる。口縁部は34と同様逆「L」字状を呈する。また、頸部上方に二条の凹線をめぐらす点も34と同様である。橙色の胎土に、鈍い黄橙色の釉が口唇部および外器面に施される。内器面にはロクロ成形痕を有する。36の口縁部は大きく外反し、頸部のくびれる器形が想定される。口縁部は折り返しにより肥厚させてあり、断面は三角形を呈する。胎土には0.5mm程度の砂粒が比較的多く混入する。胎土は灰白色で、自然釉が内器面口縁部直下に約7mm幅、外器面の口縁肥厚部下に約5mm幅で認められる。37は胴部片で、小片のため器種の推定は困難である。胎土に1mm程度の砂粒が比較的多く混入する。明褐灰色の胎土に鈍い褐色の釉が外器面に施される。内器面にはロクロ成形痕がみられ、外器面には施釉後篋による線刻文様が施されている。39は底部片で、器壁が著しく厚く、器種としては甕が想定される。外器面の一部には暗オリーブ色の釉が垂れ掛かり、内器面には自然釉が認められる。底面に指頭圧痕および篋削り痕を有する。胎土は鈍い赤橙色を呈する。40は碗の底部片である。高台は削り出しにより成形されている。胎土は淡黄色を呈する。内器面には厚さ0.2~0.3mm程度に黒色の釉が均一に施される。外器面は胴部中程まで黒色の釉が施され、高台部は露胎となっている。復元底径4.2cmである。42は碗底部片で、削り出しにより高台を成形している。胎土はやや粗雑で灰白色を呈する。内器面に0.4~0.6mm程度の厚さで赤褐色の釉が施されている。底径4.3cmを測る。41は皿の底部片である。外器面に水引き痕を有する。胎土には1mm程度の砂粒がわずかに混入し、色調は灰白色を呈する。透明の釉が内器面にごく薄く均一に施されている。復元底径5.4cmである。

陶質土器（同図38・44）、瓦質土器（同図43・47）、土器（同図33・45・46）

38は深鉢の底部片である。内器面は篋削り後、横方向のナデが施され、外器面は横ナデの痕を残す。胎土には0.5mm程度の砂粒がわずかに混入する。胎土・内外器面共に灰白色を呈する。44は器種不明の口縁部片である。口縁部は内側に屈曲する逆「L」字状で、口唇部は肥厚する。全面にロクロ成形痕がみられ、外器面肩部には二本の沈線がめぐり、その直下には把手が貼り付けられ、把手には直径1cm程の孔が穿たれている。胎土はごく緻密で、鈍い赤褐色を呈する。外器面は暗褐色を、内器面は赤褐色を呈する。復元口径11.6cmである。43は口縁部片であるが、小片のため器種は特定できない。外器面には幅5mmの凹線が縦走し、横断面は波状を呈する。胎土は比較的緻密で鈍い黄褐色、内外器面は共に黒褐色を呈する。47は火舎の口縁部片である。口唇部は幅広く平坦に成形される。口縁部外器

面に幅1mmの二条の凹線をめぐらせ、その間に13弁の菊花のスタンプ文を配する。胎土は比較的粗雑であり、色調は灰白色を鈍い黄橙色が挟むサンドウィッチ状を呈する。類例は浦添城に認められる⁽¹⁾。33は口縁部片で、器種は小片であるため特定できない。器面は内外共によく磨研され黒褐色を呈している。胎土は比較的緻密で、鈍い黄褐色を呈する。45・46は共に深鉢の底部片である。底部に粘土を継ぎ足してくびれ部を形成していることからくびれ平底土器の古い時期のものに比定できる。両者共くびれは顕著ではない。45は胎土・外器面共に明青灰色を、内器面は鈍い橙色を呈する。46は貼り付け部に指頭圧痕を有する。胎土には0.5～1mm程度の砂粒が多数混入し、色調は貼り付け部が赤橙色を、その上部は褐灰色を呈する。

3. 貨銭 (第11図48 図版15上)

貨銭はA'-86グリッド土壌①より1枚検出された。北宋銭の「崇寧通寶」で、鑄造期間は1102年～1106年である。径3.5cm、縁厚0.25cm、重量10g、方形に穿たれた中央孔の一边は0.7cmを測る。類例としては今帰仁城から二枚の出土が報告されている⁽²⁾。 (高橋)

4. 鉄製品 (第11図 図版15上)

鉄製品は鋸・釘・鏃など、細片も含めて総数27点が得られた。それらのほとんどは錆化が著しく、原形を推定することが困難なものもある。

鉄鋸 (第11図49)

49は頭部の表面積が広く、身が細いなどの特徴をもち、鋸と思われる。頭部は一部欠損している。縦断面は「L」字状、横断面は長方形を呈する。残存する長さは1.1cmである。

鉄釘 (第11図50～54)

鉄釘は残存状況の良いものが8点得られ、うち5点を図示した。すべて角釘である。

50は頭部の錆化が著しく、先端部は大きく湾曲する。最大の厚さは中心よりも上部にあり、片方は丸みを持つ。残存する長さは3.1cmを測る。52の側面観は身の最大の厚さがほぼ真中にあり、両端が尖る。類似品が浦添城⁽³⁾からも出土しており、切釘と考えられる。残存する長さは4.5cmを測る。

51・53・54は頭部がすべて「L」字状に折れ曲がっていることから折頭式の釘と考えられる。5点得られ、ここでは3点を図示した。51は頭部が一部欠損し、先端部は湾曲している。横断面は頭部が長方形、身は方形を呈する。残存する長さは3.35cmである。53は先端部が欠損する。横断面は頭部がやや台形状、身は長方形を呈する。残存する長さは4.15cmである。54は頭部の一部と先端部が欠損する。横断面は頭部、身共に長方形を呈する。

残存する長さは5.2cmである。

鉄鏃 (第11図56・57)

56は茎と身との境が明確で、関から刃部へ向けてゆるやかに撥状に開く。茎は身の基部より先端へ徐々に細くなる。この形状は後藤守一氏の言う斧箭式⁽⁴⁾に相当する。横断面は身が三味線胴形の長方形、茎は円形を呈する。残存する長さは5.4cmである。57もほぼ同様の形状であるが、関に相当する部分は不明である。横断面は身が円形、刃部は楕円形を呈する。残存する長さは5.2cmである。

用途不明品 (第11図55・58・59)

55は図の上部から下部へ向けてゆるやかに開き、先端下部が鑿状を呈する。横断面は長方形を呈する。鑿、鏃、あるいは楔であるのか、いずれとも決め難い。残存する長さは5.3cmである。58は図の中心より少し下の部分に最大幅がある。下部に突起がみられるが、実体であるのか、錆ぶくれであるのか確認できない。縦断面は全体に薄く、ゆるやかに湾曲する。残存する長さは4.4cm、最大幅は1.3cmである。59は図の上部および左部が欠失し、下端部もわずかに欠損している。縦断面は上部から下部へ向けてわずかに細くなり、先端下部は尖っている。横断面は左部から右部へ向けてわずかに細くなり、右先端部で鈍く尖る。錆は全体に薄く付着している。残存する長さは3.5cm、最大幅は4.7cmである。

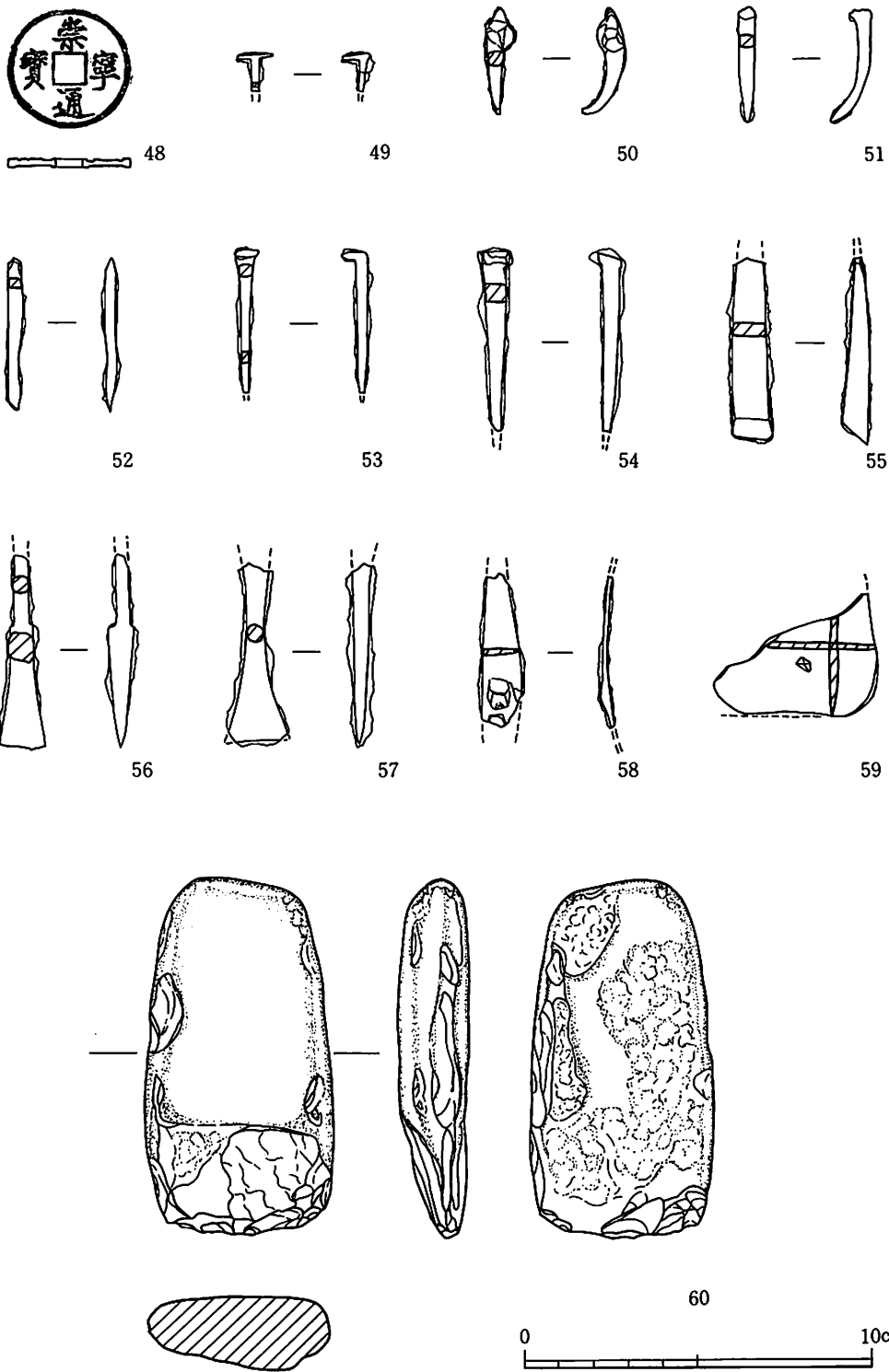
5. 石器 (第11図60 図版15下)

60は緑色片岩製の小型磨製片刃石斧である。全体を琢磨によって整形した後、磨研を施してある。裏面がローリングをかなり受けているため判然としないが、磨研は細部までは及ばないようである。左側面にわずかにくぼみを残すが、装着痕は明確には認められない。横断面は隅丸長方形に近く、刃縁はわずかに弧をなす。刃部は欠損が著しい。重量は199gである。残存する長さは10.3cm、最大幅は5.3cmである。 (池田)

6. 貝製品 (第12図)

マガキガイ製の貝玉で、自然遺物の鑑定中に発見された。螺頭部上下端を切り取り、垂飾としたものである。摩耗している箇所もあるが、全体的に保存状態は良好で一部に油沢をもつ。最大幅2.4cm、厚さ0.5~0.9cm、孔径0.5cm、C'-85グリッドII-a層より出土。

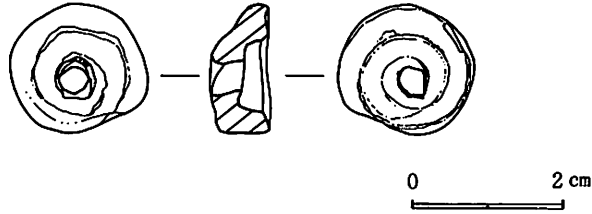
(園田)



第11図 出土遺物実測図(4)

I層：52・60 II-a層：53・58 III層：49・50・56

ピット5：54・59 ピット7：55 土壇⑥：57 土壇⑩：51 土壇⑪：48



第12図 出土遺物実測図(5)
C'-85グリッドII-a層

7. 自然遺物

今回、調査区内より採取された自然遺物はサンゴ・貝類・魚骨・獣骨に分けられる。獣骨は哺乳類がほとんどで、その他に爬虫類・鳥類が出土した。

貝類

巻貝はイモガイ科・スイショウガイ科に属するものが最も多く、その他にタケノコカニモリ科・タカラガイ科に属するものが多くみられる。二枚貝はシャコガイ科・フネガイ科・マルスダレガイ科に属するものが多い。貝種鑑定の結果、以下の26科31種が判明した。

腹足綱 Class Gastropoda

ユキノカサ科	ウノアシ <i>Patelloida (Collisellina) saccharina lanx</i> (REEVE)
ニシキウズ科	サラサバタイ <i>Tectus (Rochia) niloticus maximus</i> (PHILIPPI)
リュウテン科	チョウセンサザエ <i>Turbo (Marmarostoma) argyrostomus</i> LINNÉ
	ヤコウガイ <i>Turbo (Lunatica) marmoratus</i> LINNÉ
リュウテンガイ科	カンギク <i>Lunella granulata</i> (GMELIN)
アマオブネ科	アマオブネ <i>Thliostyra albicilla</i> (LINNÉ)
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ <i>Cyclophorus turgidus</i> PFEIFFER
ウミニナ科	ウミニナ <i>Batillaria multiformis</i> (LISCHKE)
タケノコカニモリ科	カヤノミカニモリ <i>Clypeomorus humilis</i> (DUNKER)
	オニノツノガイ <i>Cerithium nodulosus</i> (BRUGUIÈRE)
スイショウガイ科	イボソデガイ <i>Lentigo lentiginosus</i> (LINNÉ)
	マガキガイ <i>Conomurex luhuanus</i> (LINNÉ)
アツソデガイ科	
タカラガイ科	ハナピラダカラ <i>Monetaria annulus harmandiana</i> (ROCHEBRUNE)

	ホシダカラ	<i>Cypraea tigris</i> LINNÉ
アツキガイ科	ツノレイシ	<i>Purpura (Mancinella) tuberosa</i> [RÖDING]
イトマキボラ科	イトマキボラ	<i>Pleuroploca trapezium</i> (LINNÉ)
オニコブシガイ科		
イモガイ科	ゴマファイモ	<i>Puncticulis pulicarius</i> (HWASS)
アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ	<i>Achatina fulica</i> (BOWDICH)
斧足綱 Class Pelecypoda		

フネガイ科	エガイ	<i>Barbotia lima</i> (REEVE)
	リュウキュウサルボウ	<i>Anadara maculosa</i> (REEVE)
ウミギク科	オオナデシコ	<i>Spondylus anacanthus</i> MAWE
ウミギクガイ科		
シジミガイ科	シレナシジミ	<i>Geloina papua</i> (LESSON)
キクザルガイ科	サルノカシラ	<i>Chama (Pseudochama) retroversa</i> LISCHKE
ザルガイ科	カワラガイ	<i>Fragum unedo</i> (LINNÉ)
シャコガイ科	シラナミ	<i>Tridacna (Vulgodacna) noae</i> [RÖDING]
マルスダレガイ科	ヌノメガイ	<i>Periglypta puerpera</i> (LINNÉ)
	ホソスジイナミガイ	<i>Gafrarium pectinatum</i> (LINNÉ)
	アラスジケマンガイ	<i>Gafrarium tumidum</i> [RÖDING]
	スダレハマグリ	<i>Katelsia (Hemitapes) japonica</i> (GMELIN)
アシガイ科	マスオガイ	<i>Psammotaea elongata</i> (LAMARCK)
ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	<i>Quidnipagus palatam</i> IREDARE

魚骨

採取された魚骨は小片でしかも少数であった。そのうち同定できるものとしてはハリセンボン科・タイ科などに属するものがあげられる。

獣骨

獣骨にはウシ・ウマ・イノシシが最も多く、その他にイヌ・ニワトリ・カメなどがみられる。また、ウマには解体痕のあるものが出土している。獣骨・魚骨についての詳細は第2・3表を参照されたい。

ブロック・サンプリング (第4表)

Y-86・Z-85グリッドにおいてブロック・サンプリングを行った。Y-86グリッドでは北東隅に、Z-85グリッドでは南西隅に、いずれも50cm×50cmの小グリッドを設定し、前者は5cm、後者は10cmの深さで、III層のサンプリングを行った。採取したサンプルは1mm方眼のメッシュで水洗した後、乾燥させ種の同定を行った。その結果、貝・獣骨・魚骨・サンゴ・木炭・礫・土器・磁器片が検出された。それらは表に掲げた通りである。この

うち木炭は小片であって、樹種などの同定はできなかった。

(池田)

- 註(1) 浦添市教育委員会「浦添城跡発掘調査報告書」1985年
- (2) 今帰仁村教育委員会「今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ」1983年
- (3) 註(1)を参照
- (4) 後藤守一「上古時代鉄鍬の年代研究」『人類学雑誌』第54巻 第4号 1986年

五、まとめ

北谷城は、ほぼ東西に走る標高40～50mの琉球石灰岩の丘陵先端部に築かれたグスクである。グスクの規模はこれまで確認された範囲では東西160m、南北70mに及び、沖縄県下でも比較的大きいものである。地形的にみるとグスクが立地する丘陵は東が高く、西が低くかつ広い平坦部を持つ。丘陵周囲は急峻な崖を成しており、その勾配は特に南北側で顕著である。本グスクには石垣によって区画された四つの郭が認められ、連郭式のグスクと解されている。これらの郭を調査では東から一の郭、二の郭、三の郭、四の郭と仮称している。それぞれの郭の平場面積は確認された範囲で一の郭60m²、二の郭280m²、三の郭3200m²である。石垣はグスク全体を通じて野面積みと切石積みとを併用したものである。グスク内の至るところに石灰岩の自然岩盤が露出しており、これを巧みに利用して石垣を構築していることが知られる。自然地形に大きな改変を加えることなくグスクを築造している点は、北谷城の特徴と言えよう。

本遺跡の歴史的背景は「一、環境と立地」で述べたとおりで、創建年代・廃城年代などについての明確な記録は残っていない。これまでの調査によって二の郭・三の郭では上下二枚の包含層の存在が確認され、上層には14～15世紀、下層には12世紀前後との年代が与えられている。明確な遺構としては石垣・礫敷・石列・柱穴などが検出されている。

第7次調査で検出された遺構・遺物の詳細は既に述べてきたとおりであるが、ここで今回調査の内容を再度振り返り、まとめに替えたい。

まず第6次調査に継続して行った測量調査では三の郭・四の郭間の石垣現況を中心に作図した。三の郭と四の郭の境を成す石垣の南面には、テラス状の平坦面が形成され、四の郭側への突出部が2カ所認められる。このような石垣の途中に作り出されたテラスおよび突出部はいずれも何らかの意味を持ったものと考えられるが、現在のところこれに言及するだけの材料はない。

検出された遺構は次の四つに大別し、記述を行った。①「第1期の遺構」とした柱穴、②「第2期の遺構」とした配石柱穴、石敷および石敷に伴う柱穴からなる遺構群、③「その他の遺構」とした柱穴群、④「その他の遺構」とした土壌群。これらのうちその配列状況から内容の復元が可能な遺構は②のみで、東西に主軸をとる建築物と、その南側の門および門に連なる石敷が存在していたと考えられる。

出土した遺物には陶磁器・土器類・貨銭・鉄製品・石器・貝製品および自然遺物がある。その中で磁器の出土量は全体のほぼ60%を占め、そのうちでも青磁の出土が最も多い。青磁の大半は14～15世紀のもので明代を中心とする。ただしごくわずかではあるが南宋の青磁も出土している。白磁は時期的に古いものは見られず、その年代はほぼ14～15世紀におさまる。瓦質土器のうち菊花のスタンプ文を有する火舎は浦添城の他に勝連城⁽¹⁾・今帰仁城⁽²⁾・大宰府遺跡⁽³⁾などでも類例が知られ、その年代は14～16世紀とされている。自然遺物のうち、獣魚骨にはウシ、ウマ、イノシシ、イヌ、ニワトリ、ハリセンボン科・タイ科のものなどがある。中でもウシ、ウマの骨数は多いが、具体的な個体数は不明である。いずれも小型種と推定されている。ウシの橈骨には数点に同様の割れ方が認められ、ウマには解体痕のある肩甲骨が出土している。これら獣魚骨は大半が食糧残滓と考えられるが、ウマについては第6次調査での轡類似品の出土や、発掘区北側の拝所の存在などから、他の用途についても考える必要がある。

以上の成果から今回検出された遺構の時期について述べることにする。遺構③④には切り合い関係や、覆土の相違などから若干の時期差が考えられるが、これを明確にとらえることはできなかつた。ここでは「その他の遺構」を次のように時期設定を行い、これに従って以後記述する。第3期：第2期の遺構を破壊して作られた柱穴群、第4期：第2期の遺構と第3期の柱穴を破壊して作られた土壌群、以上いずれもⅢ層を覆土とする。第5期：Ⅱ-a層を覆土とする柱穴群。

まず「第2期の遺構」については、これらの遺構が形成される際に若干の整地がなされていたと考えられ、発掘区内南側のみにもみられるⅣ層がその整地層にあたる。Ⅳ層と石敷遺構内からくびれ平底土器と砧青磁の破片が出土しており、このことから「第2期」はほぼ12～13世紀とすることができよう。従って「第2期」の石敷遺構下から検出された「第1期の遺構」は12世紀以前との年代推定ができる。

第3期・第4期の遺構である柱穴群・土壌群はいずれもⅢ層を覆土とし、両時期は極めて時代差の少ないことが考えられる。土壌覆土中から出土した遺物には北宋の「崇寧通寶」

錢、片切彫の蓮弁文を有する砧青磁皿片と、古い時期のものも含まれている。しかし、その他の遺構覆土およびⅢ層からの出土遺物は、薬研彫の蓮弁文を有する青磁盤など14～15世紀のものを主体としている。また外器面に雷文帯を有する青磁碗が出土するのはⅢ層包含層より上位に限られており、第3期・第4期の遺構の埋没時期は15～16世紀と考えられる。

最後に第5期の年代について述べる。発掘区北側の拝所の設立が、第2次調査の結果16世紀以降に比定されており、Ⅱ-b層はその時の整地層と考えられる。第5期とした柱穴はⅡ-a層を覆土としており、このことから、これらの遺構の埋没時期をほぼ16世紀頃と推定できよう。

以上述べてきたように、今回明確な遺構群としてとらえることのできた「第2期の遺構」の年代はほぼ12～13世紀である。これ以外の遺構を含め、前回までの調査成果との対応関係は、二の郭の舎殿址の年代が15世紀初頭とされており、これは今回の第3期・第4期の遺構とほぼ同時期と考えられる。「第1期の遺構」は1基確認されたのみで多くを述べることはできないが、従来北谷城では曖昧であった下層=12世紀前後の様相を、「第2期の遺構」としてある程度明らかにし得たことは、今回の大きな成果と言えよう。さらにこの12世紀前後という時期は、北谷城において、城郭が本格的に築かれる以前の段階と考えられている。「一、環境と立地」において「初期グスク」として本遺跡との共通項を見いだせるものに、今帰仁城、勝連城、越来城⁽⁴⁾をあげている。これらのグスクの中で、「初期グスク」段階の遺構が明らかなものは本遺跡以外にはない。

北谷城の発掘調査は今回を含めて七回を数えるが、調査面積は全体の数パーセントに過ぎず、それぞれの遺構の解釈や、遺構相互間の関連など残された問題も少なくない。さらに継続的な調査が待たれる。

(山下)

- 註(1) 勝連町教育委員会『勝連城跡』1984年
- (2) 今帰仁村教育委員会『今帰仁城跡発掘調査概報Ⅰ』1983年
- (3) 九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和55年度発掘調査概報』1981年
- (4) 沖縄市教育委員会『越来城』1988年

図序	グリッド	遺構番号	獣骨	魚骨	その他	遺物番号
III	W-85	ピット32	ウシorウマfr.10		サンゴfr.	N-122
		土塚①	イノシシの頭骨(1'×0.8)若 LM.fr.6 ウマorシカfr.1			N-45
W-X-85			ウシorウマVe.1大若 rib.fr.3 fr.1		ウミガメ Hum.中趾趾	N-47
			イヌmax.L.(×PN)had. P長18.0,前中8.9 M長12.2,後中13.8, MP長6.4,中央中9.2.			
W-86		ピット17	LM.fr.1			N-123
			ウシorウマrib.1 fr.2			N-23
X-85		ピット16	骨片1 LM.fr.2			N-81 N-128
			ウシorウマrib.1			N-79
Y-85・86	土塚⑤		イノシシAl.fr.lad.(半欠) ウシorウマ fr.3			N-137
			骨片3			N-85
Y-85			イノシシ上1'R.ad. ニワトリ中足骨L.下(大型♀) ウシorウマfr.3	サカナ?fr.1		N-121
			ウシad.R.1趾骨若ad.10片 (長286.0,上中80.4,小型)			N-92・99 接合
Y-85			ウシ趾骨R.ad.長62.3 ウシorウマrib.fr.1 fr.3			N-95
			ウマorシカfr.1			N-64
Y-85			ウシorウマfr.4 イノシシ?rib.fr.1			N-67

第3表 出土自然遺物一覽表(1)

図序	グリッド	遺構番号	獣骨	魚骨	その他	遺物番号
III	Y-86	土塚④	骨片4	タイ類歯骨 L.1次(クロタイ?)		N-72
		ピット35	ウシorウマfr.1 ウシorウマ?fr.1 部位 不明			N-26 N-103
Y-87	Z-85	ピット28	骨片3			N-17
			ウシorウマfr.1		カメの甲羅 カメの趾.1	N-69
Y-87	土塚⑥		ウシorウマ?fr.1 rib.fr.1			N-149
			骨片2			N-155
Y-87	土塚⑦		ウシorウマfr.1			N-77
			ウシorウマfr.1			N-87
Z-86	A'-86		骨片3 ウマMcaMt.下fr.1 ad. ウシ趾骨若fr.1, LM.fr.1			N-139 N-82
			ウシorウマ 若 大趾骨? 中間部fr.1 rib.1, LM.fr.1			N-83
Z-86	A'-86		イノシシ?rib.fr.1			N-73
			中型のトリ脛骨片1			N-127
Y-86	土塚⑧		LM.fr.1			N-89
			ウシ下M. L. ad. (長34.6,前中14.1)			N-115
C'-85	ピット11			サカナ中頭蓋骨 (骨不明サカナ1)		N-140
			トリ四肢骨片fr.1.	ハリセンボン科類 骨(上下)大型1		N-24
C'-85	ピット12		トリ四肢骨片1			N-153
			骨? fr.1			N-50
C'-86	ピット14		ウシorウマfr.1			N-156
		骨? 骨片	ウシorウマfr.1			N-149
C'-86	ピット14		ウシorウマfr.1			N-111
			LM.fr.9			N-86

順序	グリッド	遺構番号	獣骨	魚骨	その他	遺物番号
III	C'-87	土城②	ウシRad.L.,上fr.ad. ウシScap.L.ad.小型(未定種)			N-59
			ウシorウマSc.fr.1.rnb.3 ウシorウマ?fr.48.ve.1			
			LM.fr.1			N-58
			LM.fr.3			N-30
			骨片3			N-17
			ウシorウマ椎骨のspinel			N-117
			骨片1			N-120
			LM.fr.4(ウシorウマの四肢骨)			N-87
			ウシ末節骨R LM.fr.5			N-106
			イノシシ尺骨R. 腕骨R. Rad.上中2.3cm.前後径15.0cm			N-114
II-a	W-86	葦原カブトレンヂ	ウシ頰骨R.1 ad ウシorウマ rib.fr.1 " fr.1	中型魚ve.1 小型魚ve.4		N-9
			ウシorウマfr.1			N-15
			ウシorウマrib.fr.1			N-132
			ウシorウマfr.1			N-21
			ウシ中節骨R. (小型 長38.1cm 基部径7.7cm)			N-143
			ウシorウマ椎骨の頰fr.1			N-28
			ウシ基部骨fr.1 LM.fr.1			N-29
			ウシorウマ幼成脛骨R.上.			N-54
			ウシorウマfr.4 ウシorウマrib.fr.1			N-14

順序	グリッド	遺構番号	獣骨	魚骨	その他	遺物番号
II-a	C'-86	C'-87	イヌ?rib.fr.1 LM.fr.2			N-113
			ウシorウマrib.fr.3 ウシorウマfr.2 rib? ウシ上頸 第3後臼歯 (R.ad.長29.0cm 前歯9.8cm)			N-9'
			ウシorウマfr.2			N-13
			ウシorウマfr.2			N-37
			LM.fr.1			N-90
			ウシ中頰骨の近位部 小骨 LM.fr.5			N-56
			ウマUI.R.?若?			N-44
			LM.fr.1			
			LM.fr.1			N-133
			LM.fr.1			N-39
I	D'-87	ピット20	LM.fr.1			N-3
			LM.fr.1			N-136
			LM.fr.1			N-138
			LM.骨片1(ウシorウマ)			N-4

註) Rad: 腕骨 ad: 成獣 UI: 尺骨 fr: 破片 Scap: 肩甲骨
ve: 椎骨 LM: 陸獣 Mc: 中手骨 Mt: 中足骨 rib: 肋骨
L: 左 R: 右 上: 近位部 若: 若獣 幼: 幼獣
四肢骨: 四肢の骨。例えば上腕骨・尺骨・腕骨・大腿骨・胫骨を示す。
基部骨: 指骨のうち最も基部のもの 中節骨: 指骨のうち最も中間のもの
末節骨: 指骨のうち最も先端のもの

第3表 出土自然遺物一覧表(2)

層序	グリッド	獣骨	魚骨	その他
III	Y-86 北東隅	ウシorウマfr.1 ウシorウマ歯fr.1 小骨片約100 (サカナとLM.)	ブダイ類 歯骨R.大 エイ類 ve.1 種不明中型魚ve.3 " 小型魚ve.3	ウミヘビ? ve.1
	Z-85 南西隅	イノシシ臼歯fr.1 小型陸獣 尾椎1 小骨片約100	種不明中型魚ve.1 " 小型魚ve.12 " 中型魚 タイ類 歯1	

グリッド別獣魚骨一覧表

註) Rad: 橈骨 ad: 成獣 U1: 尺骨 fr: 破片 Scap: 肩甲骨
ve: 椎骨 LM: 陸獣 Mc: 中手骨 Mt: 中足骨 rib: 肋骨
L: 左 R: 右 上: 近位部 若: 若獣 幼: 幼獣
四肢骨: 四肢の骨。例えば上腕骨・尺骨・橈骨・大腿骨・胫骨を示す。
基節骨: 指骨のうち最も基部のもの 中節骨: 指骨のうち最も中間のもの
末節骨: 指骨のうち最も先端のもの

貝種	個体数	占有率(%)	貝種	個体数	占有率(%)
Y-86グリッド			Z-85グリッド		
ウミニナ	197	49.50	カヤノミカニモリガイ	63	15.33
カヤノミカニモリガイ	48	12.06	マガキガイ科	26	6.33
カンギク	13	3.27	ウミニナ	14	3.41
アマオブネ	12	3.02	アマオブネ	9	2.19
オキナワヤマトニシ	4	1.01	アツキガイ科	2	0.49
タカラガイ科	4	1.01	ハナビラダカラ	1	0.24
スダレハマグリ	3	0.75	アラスジケマンガイ	1	0.24
アツキガイ科	3	0.75	ホソスジイナミガイ	1	0.24
アラスジケマンガイ	2	0.50	蓋	132	32.12
ホソスジイナミガイ	2	0.50	巻貝不明	132	32.12
マガキガイ	2	0.50	二枚貝不明	30	7.30
リュウキュウサルボウ	1	0.25			
蓋	45	11.31			
巻貝不明	55	13.82			
二枚貝不明	7	1.76			
総個体数	398		総個体数	411	

グリッド別貝個体数一覧表

○この統計の数値は巻貝については殻頂部のみを数えたものである。また二枚貝については小破片が多く、右殻・左殻の判定が困難であったため、殻頂部を数えて二分した数値を示した。

○分類するにあたり、木下尚子氏ならびに宜野湾市教育委員会の方々による鑑定結果と、下記の文献を参考にした。

吉良哲明「原色日本貝類図鑑」保育社 1959
渡部忠重「続原色日本貝類図鑑」保育社 1961
白井祥平「原色沖縄海中動物生態図鑑」新星図書 1984

第4表 ブロック・サンプリング一覧表